

優秀修士論文概要

J・M・クツェーの *Summertime* における書くことの問い

見 角 魁 星

本論文は、J・M・クツェーの小説 *Summertime* (2009) を研究対象とする。*Boyhood* (1997)、*Youth* (2002) に続く三作目の自伝的小説として発表された本作は、三人称かつ現在形の語りを特徴とする前二作とは大きく異なる語りの手法——作者の死後に行われた五つのインタビューと断章形式の遺稿——を用いて、主にデビュー作 *Dusklands* の発表前後である一九七二から一九七五年の作家自身を描写した作品である。先行研究の多くは、実験的な語りの手法に着目し、‘Confession and Double Thoughts: Tolstoy, Rousseau, Dostoevsky’ (1985) (*Doubling the Point* 所収。以下、*Confession* と表記) に代表される作者自身の自伝についての理論的考察との関連で本作を分析している。しかし、*Summertime* というテキストにおいては、物語行為の詳細な分析から抜け落ちる物語内容の細部、不問に付されている物語世界の空白が重要な意味を担っていると考えられる。物語内容を注意深く読解することは、本作の複雑さを理解する上で欠かせない上に、*Confession* をはじめとするクツェーの理論的な思索と *Summertime* というフィクションを並べて論じる際の新たな回路を見出すことにもつながる。

そこで本論文は、*Confession* と *The Good Story: Exchanges on Truth, Fiction and Psychotherapy* (2015) (以下 *Story* と表記) の二冊を中心に、クツェーの真実に関する思考の変遷を辿った上で、真実を書くことにこだわる作家の核心にある問題意識を把握することを第一の目標とする。その上で、*Summertime* の物語内容を読解する(物語内容の空白を推測する作業も含まれる)ことで、本作で提起される「真実を書くこと」をめぐる複数の問いと、それらの問いが複雑化されていくさまを確認することを第二の目標とする。クツェーが真実という語を使って指し示そうとしているのは、欺瞞や無知による歪曲を完全に排した認識である。そしてそれは、個人や集団による自己規定や歴史認識の理想的な状況として想定される。しかし、本論文における *Confession* の読解で確認する通り、そのような絶対的真実を知ろうとする試みは、「より真実」に思われる暫定的な認識を無限に作り出す袋小路に陥る。その点で絶対的真実は到達不可能であり、真実は真実と言い張ったフィクションにしかなりえず、真実を語ろうとする試みは徒労である。しかしクツェーは、理論的考察とは一線を画す小説たる言語表現を通して、真実への到達可能性を思考している。集団が真なる歴史認識に到達することを諦め、心地よい物語に安住する社会において、フィクションを書くことにどのような意味があるのか。前述した物語内容の細部は、この問いに収斂していく。

第一章では、*Confession* と *Story* を中心に、真実を巡るクツェーの思索の軌道を追うことで、*Summertime* を読解する上で鍵となる二つの特徴を確認した。一つ目は、「個人による真なる自己認識の到達不可能性」と「集団による真なる歴史認識の到達不可能性」の結びつきである。*Confession* において、告白文学に見られる個人の自己認識が陥る袋小路を明らかにしたクツェーは、*Story* において、時代精神の論理を駆使して先祖の罪を忘却する社会を、自己欺瞞に陥った個人に喩えている。集団を個人と

見なす考え方に、疑念を抱きつつも拘泥するクッツェーの姿勢は、*Story*を通して一貫している。二つ目は、到達できないと知りつつも真実を求め続ける態度に、悪を断ち切る可能性を見出している点である。個人も集団も何らかの言説を作り出すことで自己を規定するが、それが真実としての価値を獲得することは叶わない。しかし、到達不可能性を知りつつ真実を求め続けることでしか、自己欺瞞のフィクションを回避し、他者に対して悪を為す可能性を排除することはできない。この主題は、*Summertime*の前作である *Diary of a Bad Year* (2007) において、イラク戦争を行ったアメリカを批判する主人公 Juan の主張を通して確認できるし、自己犠牲によって暴力の連鎖を断ち切ったイエスに対してクッツェーが寄せる関心からも確認できる。一方で、絶対的真実を信奉することが危険であることは、オランダ改革派教会が南アフリカにおいてアパルトヘイトを下支えした事実からして明白である。*Youth* において主人公ジョンは、パゾリーニの『奇跡の丘』におけるイエスの復活を観て、理由も分からず涙を流す⁽¹⁾。その記述からは、クッツェーが抱くキリスト教への屈折した態度が読み取れる。到達不可能性に対する居直りであるシニシズムと、絶対的真実を保証するキリスト教的恩寵のあいだを揺れ動きながら、クッツェーはフィクションを書くという応答を選ぶ。

第二章では、個人に関する真実と集団に関する真実を並置している点で、*Summertime* が後期のクッツェーの問題意識を反映していることを確認した。その上で、差別的な歴史認識を標榜するアフリカーナ集団の罪から距離を取って批判することをやめ、ジョンの大学教授時代に同僚だったソフィーが、ジョンは「たとえ政治的に、アフリカーナが負うべき責任すべてに結びつく」としても「自尊心を維持しつつ自分をアフリカーナ集団から分離する方法はないと思った」のではないかと推測している⁽²⁾通り、アフリカーナのアイデンティティを引き受けて南アフリカ社会の内部で生きていくことの持つ可能性が本作から読み取れることを、Rebecca L. Walkowitz の *Born Translated: The Contemporary Novel in an Age of World Literature* (2015) を参照しつつ確認した。そのことを踏まえ、真実が歪曲される社会の中で、フィクションを書くことにどのような意味があるのかという問いを深めていくテキストとして、物語内容の細部を読解した。「Margot」の章では、他者を物語ることの暴力と、語ることでしか真実に近づけないという主張が緊張関係を保ちながら展開していくことを確認した。また、肉体の消滅を乗り越える方法としての書くことは、ジョンにとって、彼自身を縛る血縁関係とは別の回路で未来世代とのコミュニケーションを生み出し、読者を介して真なる歴史認識へと集団を向かわせる可能性を持っている。*Summertime* においては、作家としてのジョンに批判的な登場人物が数多く登場することで、

(1) The first film he sees with his new glasses is Pasolini's *Gospel According to St Matthew*. It is an unsettling experience. After five years of Catholic schooling he had thought he was forever beyond the appeal of the Christian message. But he is not. The pale, bony Jesus of the film, shrinking back from the touch of others, striding about barefoot issuing prophecies and fulminations, is real in a way that Jesus of the bleeding heart never was. He winces when nails are hammered through the hands of Jesus; when his tomb is revealed to be empty and the angel announces to the mourning women, 'Look not here, for he is risen,' and the Missa Luba bursts out and the common folk of the land, the halt and the maimed, the despised and rejected, come running or hobbling, their faces alight with joy, to share in the good news, his own heart wants to burst; tears of an exultation he does not understand stream down his cheeks, tears that he has surreptitiously to wipe away before he can emerge into the world again. (Coetzee, *Scenes*, 273)

(2) My opinion is that under the gaze of history he felt there was no way in which he could separate himself off from the Afrikaners while retaining his self-respect, even if that meant being associated with all that the Afrikaners were responsible for, politically. (Coetzee, *Scenes*, 464)

書くことの持つ可能性が逆説的にあぶりだされる構造となっている。一方で、書くことはジョンにとって終始困難と疑念を伴っていたことが、*Summertime* の最終部である「日付のない断章」では示唆される。「翌日も生きていてそれを継続する確信がなければ、散文で冒険に着手しても意味はない」⁽³⁾という *Summertime* の一節を命題と見なして対偶を取れば、「散文で冒険に着手することに意味を見いだせるならば、翌日も生きていてそれを継続する確信があるということだ」となる。*Summertime* においては、書くことの肯定は必ず否定を経由する。真実の到達可能性という幻想を徹底的に批判する本作は、作品の細部に真実を書くことへの希求を忍ばせている。

参考文献

- クッツェー、J・M. (2014) 『サマータイム、青年時代、少年時代——辺境からの三つの〈自伝〉』 くはたのぞみ訳、インスクリプト
- . (2015) 『世界文学論集』 田尻芳樹訳、みすず書房
- Attwell, David, Coetzee, J. M. (1992) *Doubling the Point: Essays and Interviews*, Harvard University Press
- Coetzee, J. M. (2008) *Diary of a Bad Year*, Penguin Books
- . (2012) *Scenes from Provincial Life*, Penguin Books
- Coetzee, J. M, Kurtz, Arabella. (2016) *The Good Story: Exchanges on Truth, Fiction and Psychotherapy*, Penguin Books
- Kannemeyer, J. C. (2012) *J.M. Coetzee: a life in writing* (English Edition), translated by Michiel Heyns, Scribe Publications
- Rebecca L. Walkowitz (2015) *Born Translated: The Contemporary Novel in an Age of World Literature*, Columbia University Press

(3) There is no point in embarking on an adventure in prose if one lacks confidence that one will be alive the next day to carry on with it. He plays with thoughts like these – the thought of poetry, the thought of prose – as a way of not writing. (Coetzee, *Scenes*, 480-481)